

風景に住まう ~棚田に没入する暮らし~

STORY

01 自然との暮らし

人間が地球に誕生してから現在までの500万年間のうち99.99%を人間は自然の中で暮らしてきた。長い歴史で見ると人間ははるかに長い時間を自然とともに暮らしているため自然との暮らしに適応している。急激に都市化が進み多くの人が都市部に集中している現在、もう一度自然の中での暮らしを思い出した方が良いのではないかと考える。何もかもがありすぎる都市部では何かと問題も多くなる。何もないということが実は一番贅沢なことなのかもしれない。何もないという贅沢を味わうことができる土地で暮らしていくことをこの卒業制作で提案する。

02 日本の棚田の減少

棚田は日本の原風景ともいえる美しい風景をつくりだしている。人の生業と自然がつくりだした風景であり、その風景の中にはこれまで受け継がれてきた歴史も存在している。日本にはそのような美しい棚田が多く存在していた。しかし、現在では少子高齢化による棚田管理の担い手不足や減反制作の推進により、管理されなくなった耕作放棄地が数を増やしている。このまま耕作放棄地が増え続ければ近い将来日本の美しい棚田風景は姿を消してしまう。現在、日本棚田百選の選定や棚田オーナー制度による棚田保全活動が行われているがそれでも耕作放棄地の増加は続いている。これまで受け継がれてきた日本の棚田風景は守る価値があり、これからも受け継がれていくべきであると考えている。そのため、本計画では耕作放棄地の増加が進む棚田集落においてこれから先棚田風景の継承が行われていくための建築を計画する。棚田風景を観光地化し経済的な利益を生むのではなく、これから先棚田が継承され風景が受け継がれていくための計画であり、建築の規模や機能もその考えに則って考えている。

舞台は畑の棚田集落



棚田写真

棚田写真

耕作放棄地写真

耕作放棄地写真

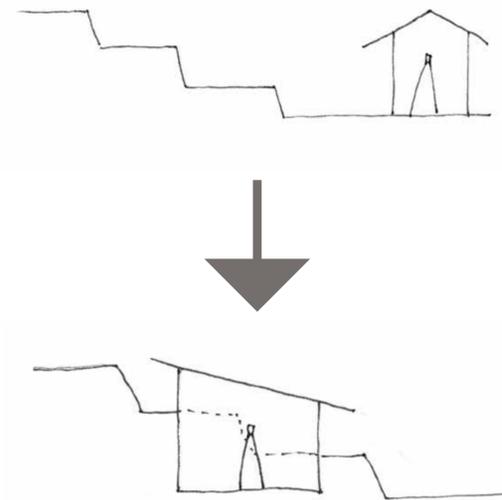
03 自然の中に没入し自然と一体になる

自然を自分とは切り離れたものとして客体視するのではなく、自分自身が自然の中に没入し自然と一体となって暮らすことで自然（風景）に対する責任感も違ってくる。棚田は人の手で自然をつくり変えてきたものである。都市も自然をつくり変えたものであるが、棚田は自然の地形を活かしながら自然に寄り添ってつくった変えた里山である。森のような全くの自然の中に住まうことは厳しいが人間の手によって築かれた二次自然の中に住まいながらその二次自然を生業としていく暮らしはこれまで行われてきた。そのような暮らしの延長線上に自然との一体化があると考え、建築を棚田の中に没入する形で考え、その中で暮らしに期待を寄せている。

PROGRAM

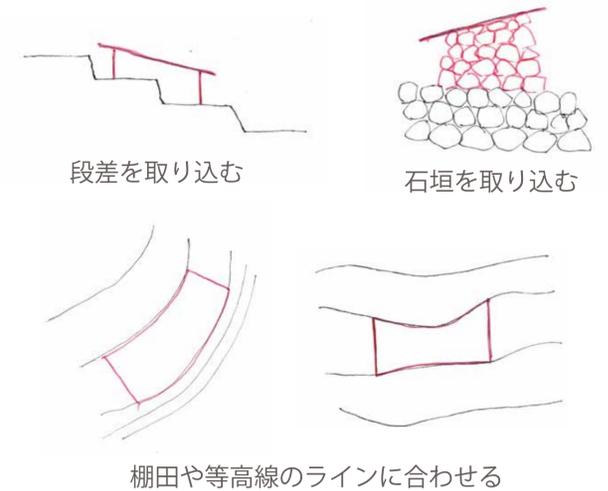
01 棚田に没入する

人間が自然と一体となるよう建築を棚田に没入させる。視覚的に棚田に触れるのではなく、棚田を直接感じる。



02 周辺環境から考えられた建築

現代の建築の多くは自然と切り離されてしまっている。環境を建築に取り込むため周辺環境から優先して建築を考えていく手法を取った。



03 集落内外の交流

棚田オーナー制度との連携

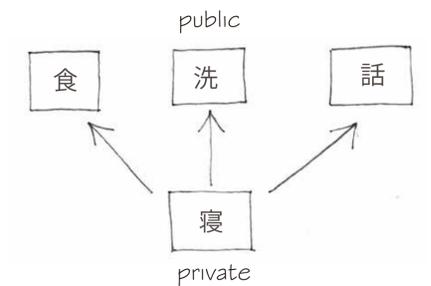
現在の畑の棚田オーナー制度ではオーナーは作業の前日に農家の方の家に泊まることになっている。これから先オーナーが増えていくと農家の方の負担が多くなるため、オーナーが泊まることのできる宿泊棟を計画する。この宿泊棟には観光客屋この土地に魅力を感じて訪れた人も宿泊することができる。

交流型の建築

棚田オーナーの継続や棚田管理への興味の要因に都市農村交流があり、外部の人と集落の人との交流は非常に重要であることが分かった。そこで集落内部の人同士や集落内外の人々が交流できるような場所を計画する。

共用で行う生活機能

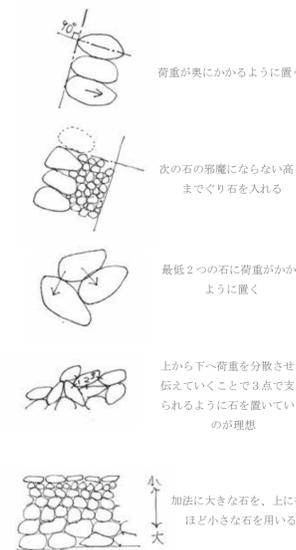
宿泊施設には最低限の宿泊機能だけを入れ込んで、それ以外は共用で行うことで交流を促す。



04 石積みの継承

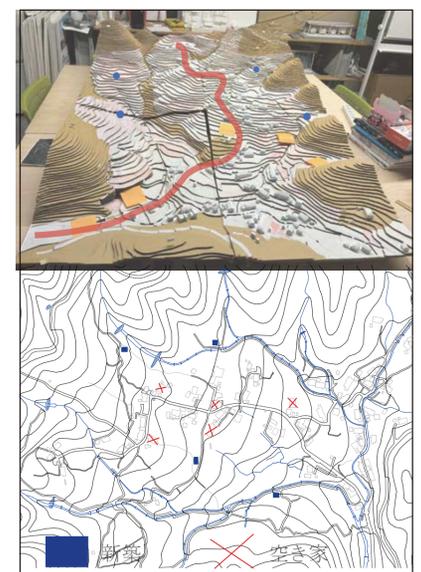
畑の棚田風景を形成している大きな要因の1つに石垣があり、中でも石をただ積み上げた空積みと呼ばれる積み方で積んだ石垣が多い。空積みの石垣はメンテナンスが必要なため、集落の人たちでメンテナンスができるように石積み技術継承のためのワークショップを行う。外部から訪れた人も参加することができ集落内外の交流の場ともなる。

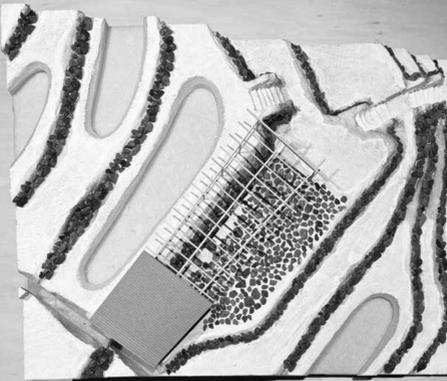
石積みのポイント



05 風景の余白

畑の棚田集落の特徴として棚田の中に主要道路が通っていて主要道路沿いに建物が集中していることから、棚田風景への眺望性が損なわれてしまっている。そのためこれから先空き家が出てきたときに、リノベーションするのではなく取り壊し、風景への眺望のための余白をつくっていく。余白となった土地は休憩所や作業場として開放する。





見下ろし展望台

集落全体を見下ろすことができ、下から連続する棚田の延長線上となっている場所に計画した。



トラクター車庫

将来、耕作放棄地を水田に再生させていくため、耕作放棄地が集中するエリアの中心部に配置した。



森の展望台

集落上部と下部に位置するそれぞれの展望台とのバランスを考慮し、集落の中間部に展望台を計画した。耕作放棄地に人口杉が植林されている特殊な場所。



宿泊棟 (3～6人)

棚田が感じられるよう棚田の段差が残る耕作放棄地に計画した。このエリアの棚田は土羽で法面が構成されている。



住宅

棚田風景への眺望性を確保するため主要道路沿いは避けつつ、集落の人たちとの交流もできる場所に配置した。

SITE 滋賀県高島市畑の棚田



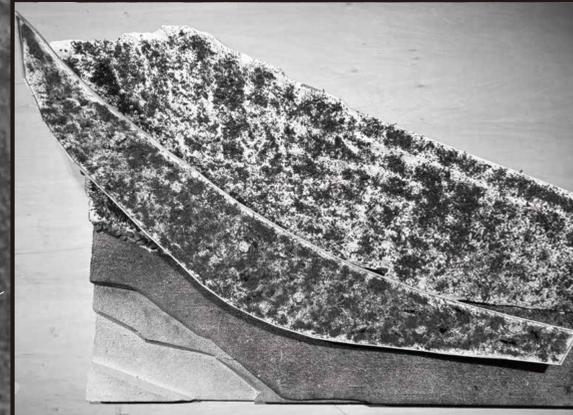
交流型特産物工房

集落の外部から訪れる人々を迎え入れたり、集落に住む人たちの交流の場とするため、集落の入り口付近に配置した。



宿泊棟 (1人)

棚田を感じ、棚田と一体になるため棚田の段差が残る耕作放棄地に計画。周囲の耕作放棄地は将来再生されていく。



バス停

集落の入口に位置し、外部から訪れる人々を迎え入れるためのバス停の整備を計画した。



宿泊棟 (2人)

棚田を感じ、棚田と一体になるため有機的な棚田のラインが残る耕作放棄地に計画した。周囲の棚田は将来再生されていく。



見上げ展望台

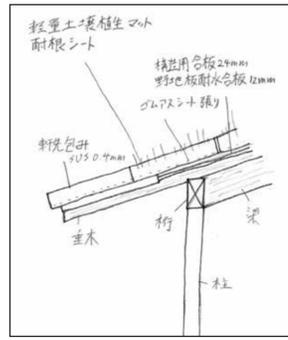
集落をしたから見上げるための展望台として、連続する棚田の下部を延長するように配置した。

01. バス停

延床面積：102.45㎡

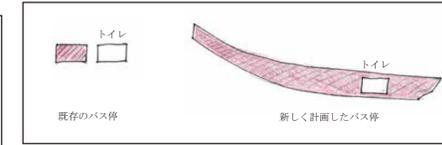
1-1. 集落の入り口としての在り方

畑の棚田集落の魅力の一つとして四季で変化する風景がある。集落の入り口に立つ建築の在り方として集落の象徴となるように考えた。そこで、バス停の屋根を緑化し植物が成長したり葉の色を変えたり枯れたり四季によって表情を変えるようにした。



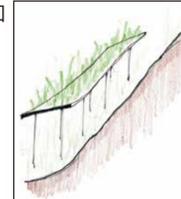
1-2. バス停機能の拡張と展望機能

既存のバス停では規模が小さいと感じたため、規模を拡大した。



1-3. 集落を囲む山との調和

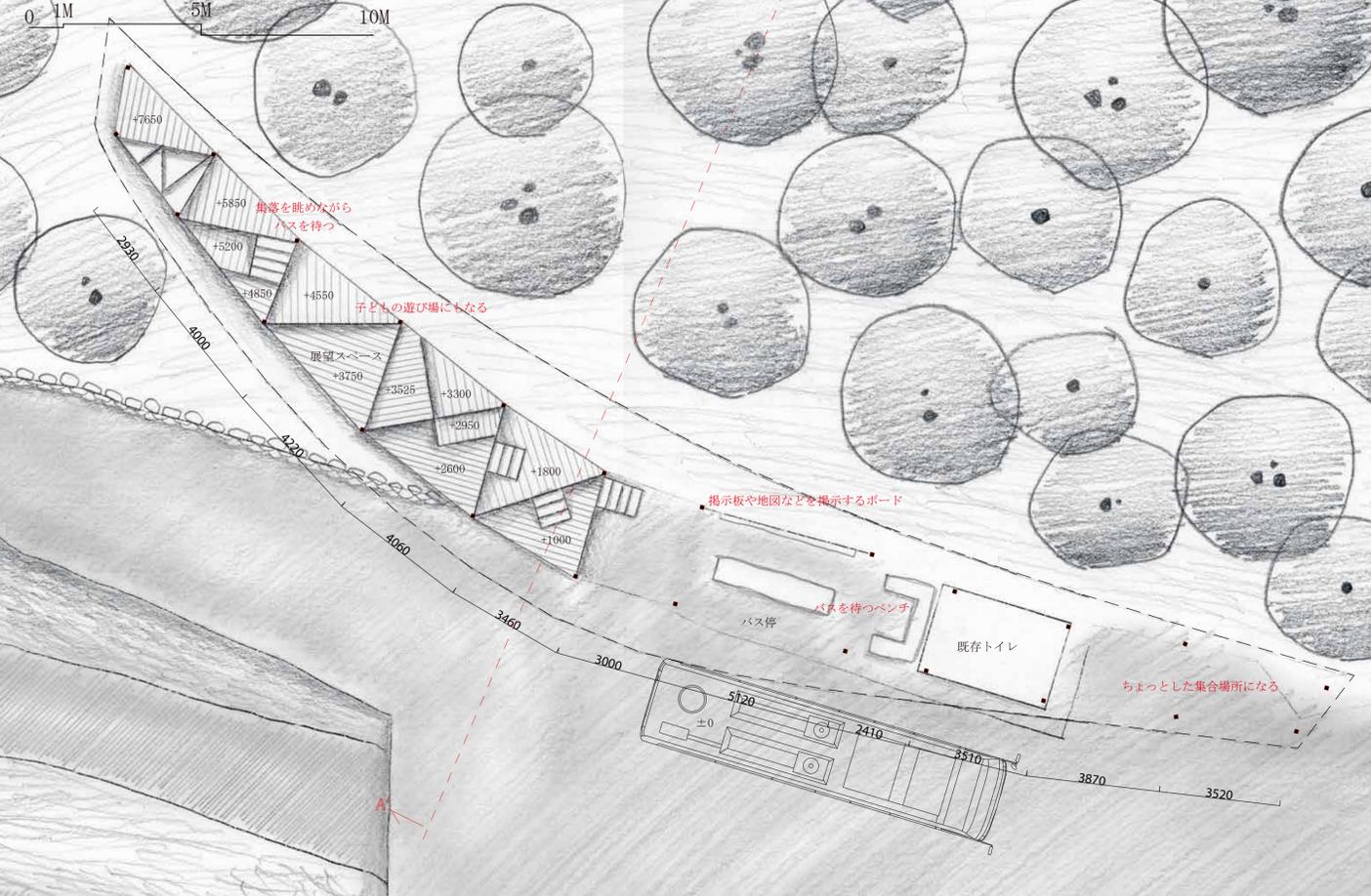
背後には山が下りてきている。集落を囲んでいる山々との調和を図るため山肌に沿うように屋根をかける。



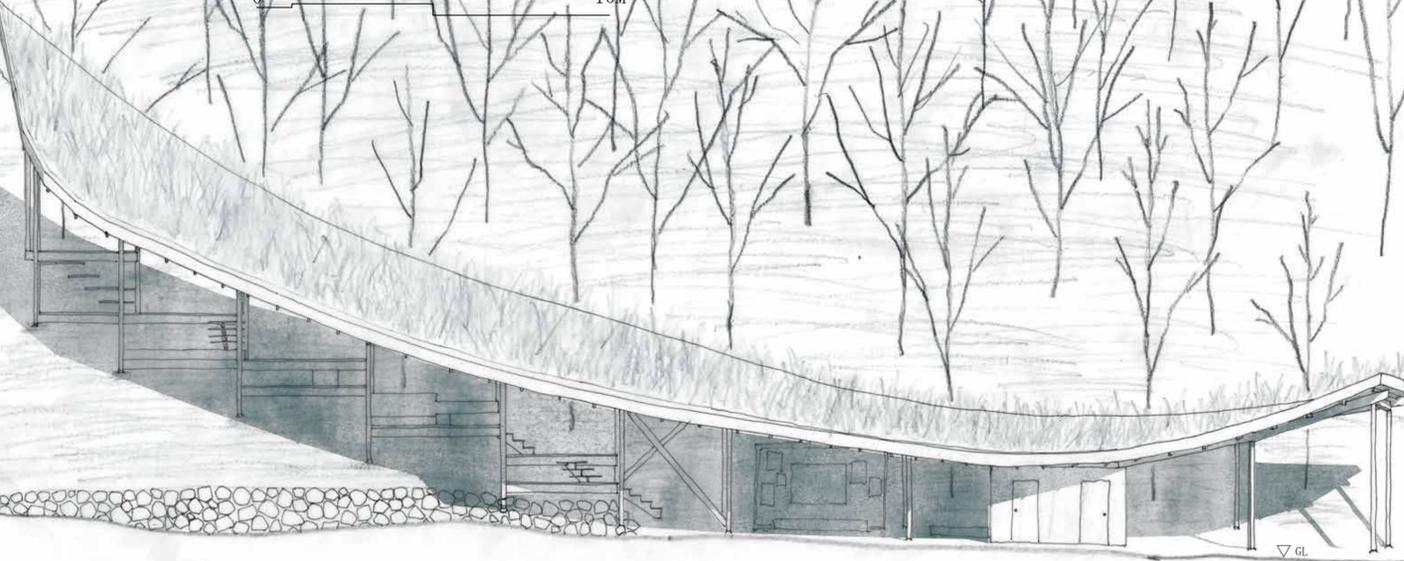
A-A' 断面図 1/100



配置図兼平面図 1/100



西側立面図 1/100



02. 交流型特産物工房

延床面積：152.49㎡

2-1. 旧特産物工房の復活と機能の拡張による交流の場

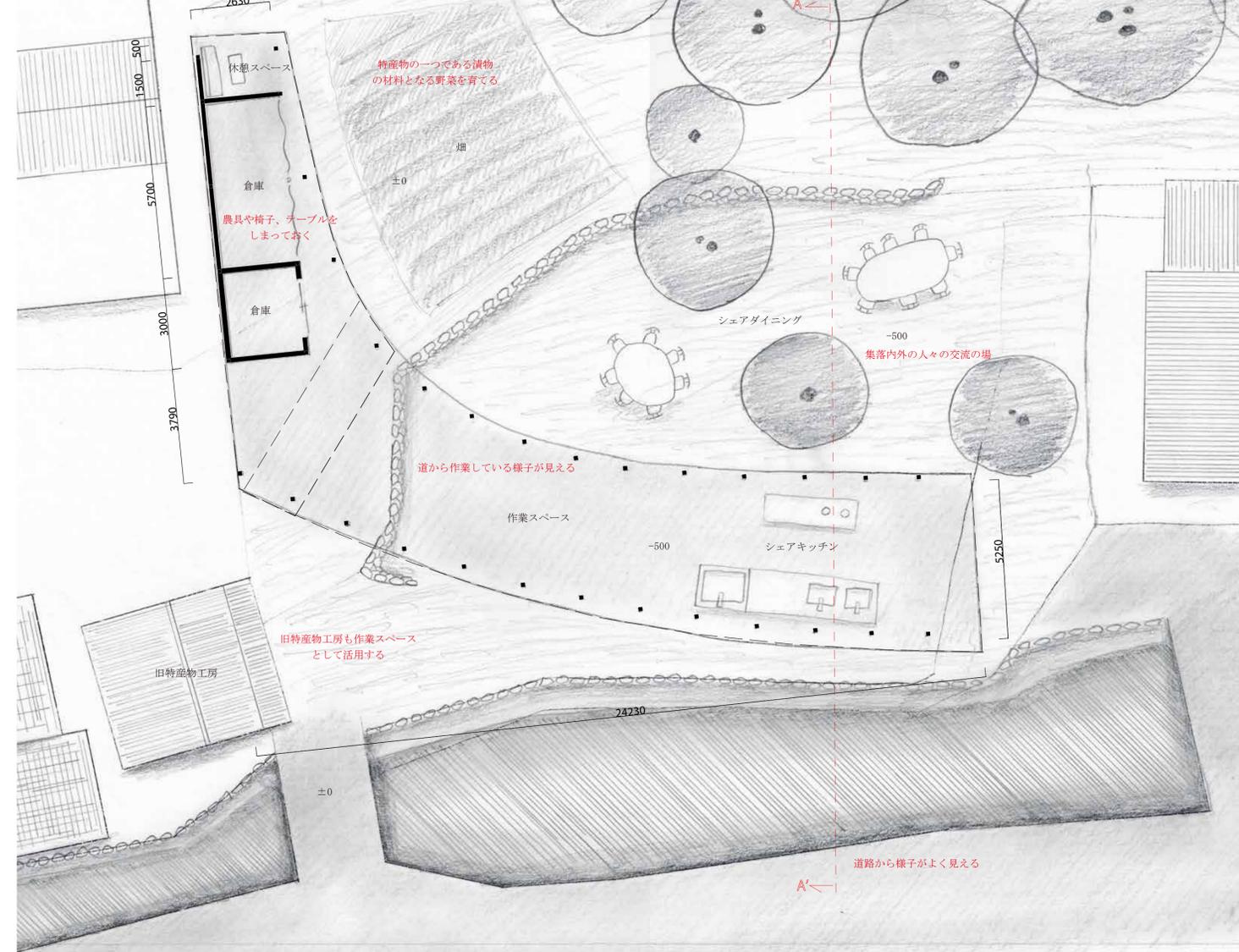
かつて機能していた特産物工房の隣の敷地に計画する。特産物生産のための工房の機能を復活させ引き継ぐとともに生産以外にもみんなで料理をするキッチンやテーブルを囲むダイニング、特産物の一つである漬物の野菜を育てる畑、畑作業の道具をしまうための倉庫や作業場の機能を付加する。



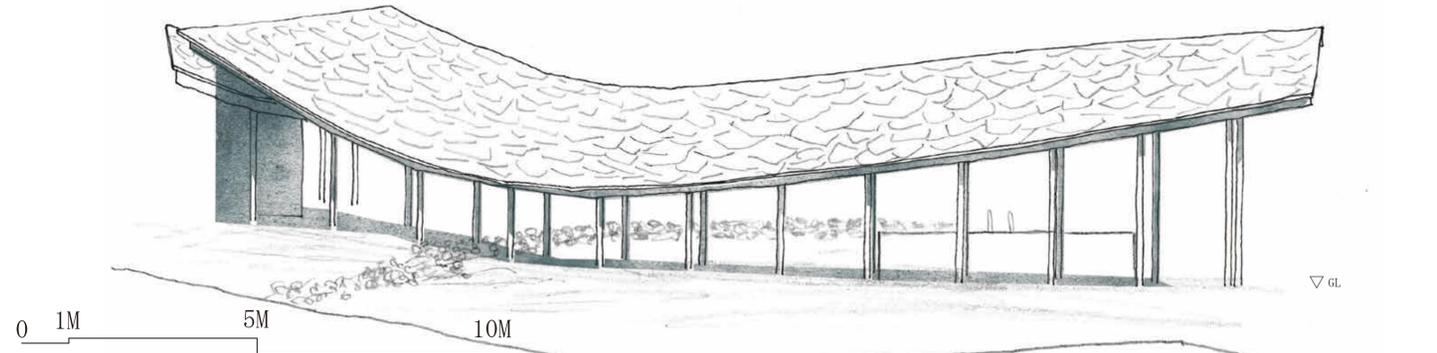
2-2. 場を作る石の屋根

キッチン、作業場、倉庫、休憩スペースを緩やかにうねる屋根で繋ぎ、一体の空間とする。このエリア付近の段差には石が多く用いられていたため、屋根の仕上げには石を用いた。薄く切った石を使用し、瓦のように並べる。

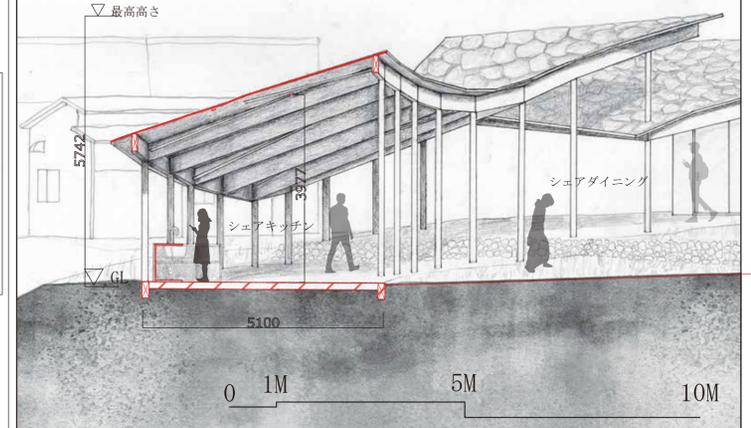
配置図兼平面図 1/150



西側立面図 1/75



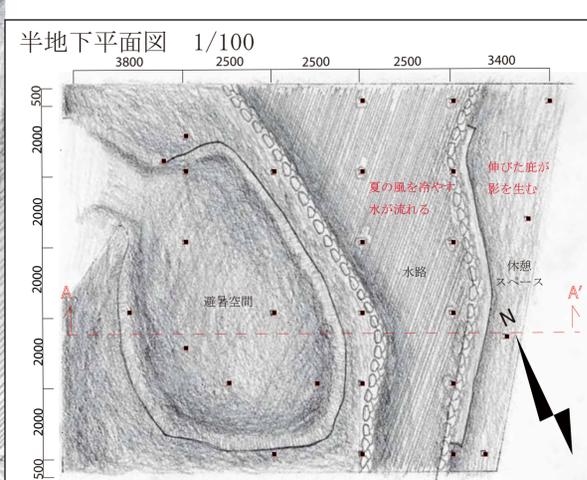
A-A' 断面図 1/75



配置図兼屋根伏図 1/100



半地下平面図 1/100



03. 見上げ展望台

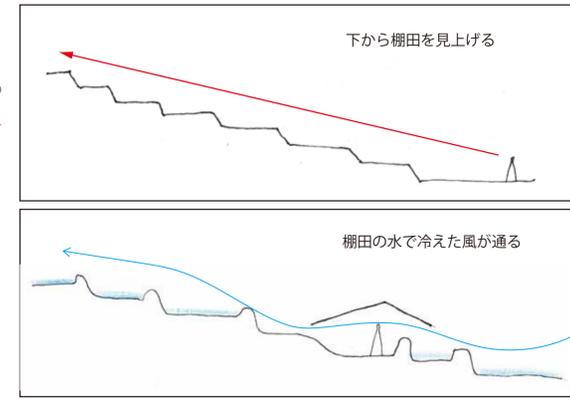
3-1. 棚田集落特有の展望機能

畑集落の一番下から上を見上げるための展望台。棚田を下に延長するように地に這わせ風景との共存を図った。

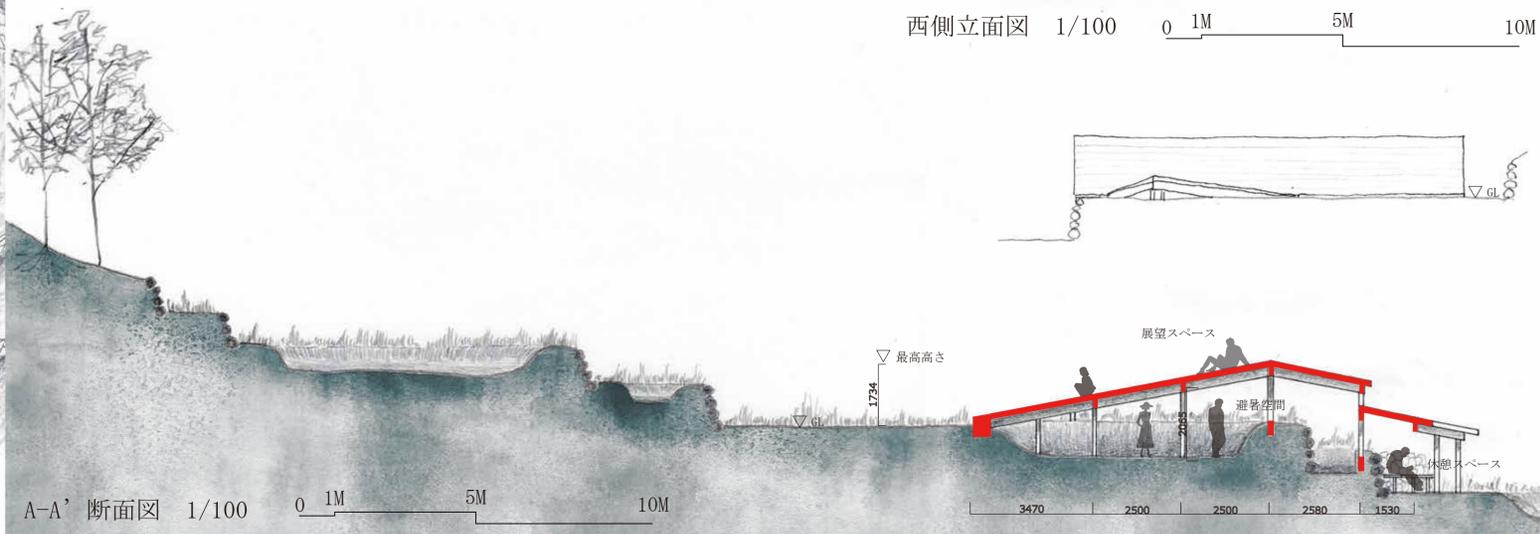
3-2. 夏の空間

半地下空間は展望部分の屋根によって落ちた影と夏に水のはられた棚田で冷やされた風が通ることひんやりと涼しい避暑空間となる。

延床面積：85.74㎡

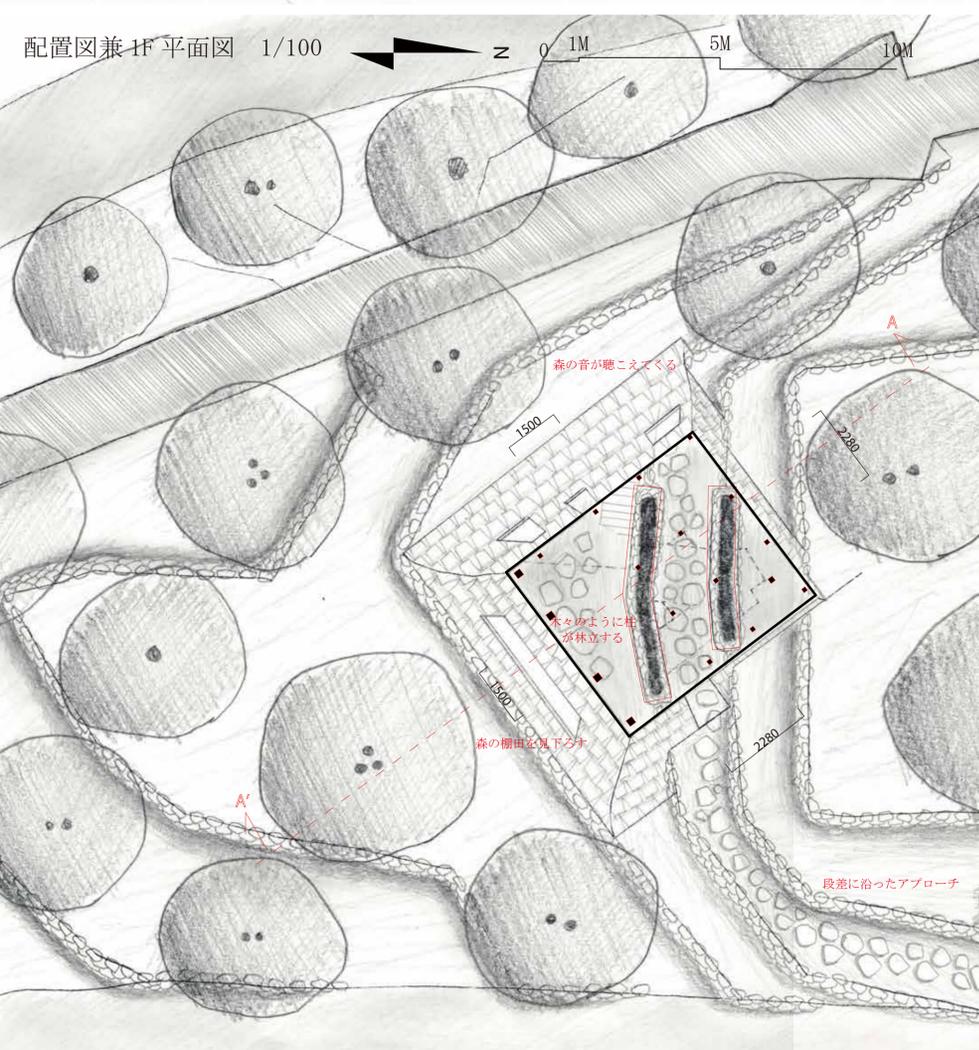


西側立面図 1/100

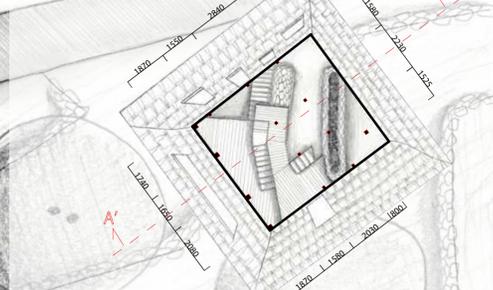


A-A' 断面図 1/100

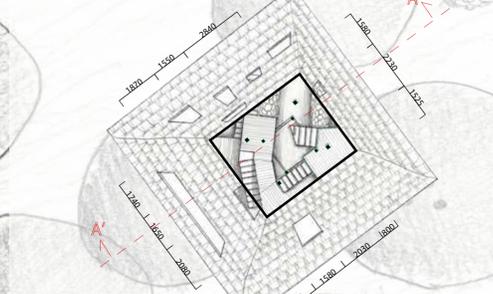
配置図兼1F平面図 1/100



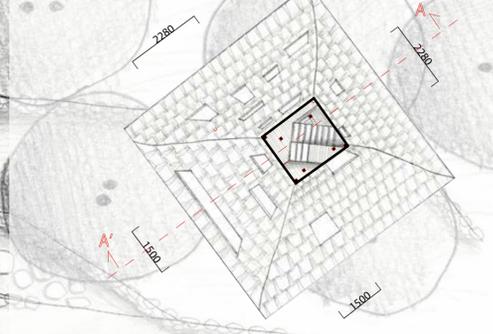
2F平面図 1/150



3F平面図 1/150



4F平面図 1/150

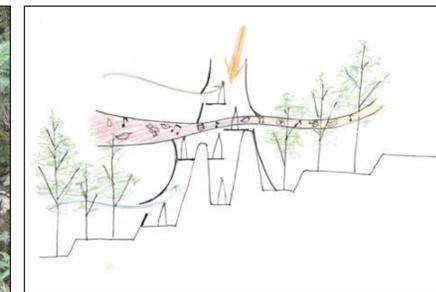


04. 森の展望台

延床面積：124.22㎡

4-1. 人口杉が生える棚田

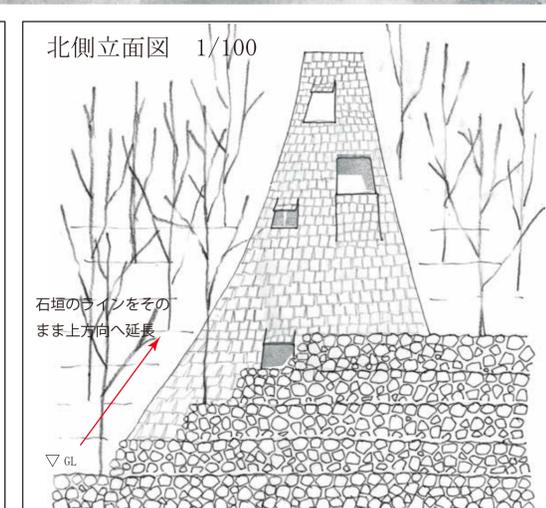
このエリアはかつて棚田であった場所に人口杉が植林されそのまま時間が経過し、段差が残ったまま木が生えた特殊な場所である。



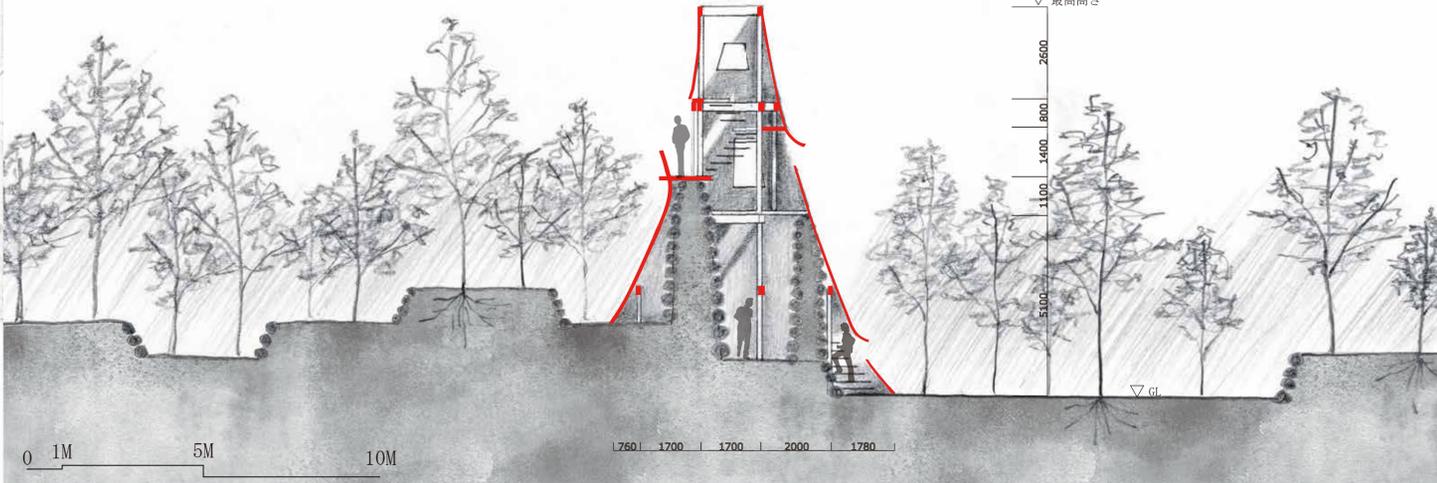
4-2. 森を感じる展望台

森の中に建てる展望台として森を感じることができるようにしようと考えた。開口部から入る風や音、光、風景などを感じながら上へと上る。不規則に林立する柱やヒューマンスケールから外れた天井高などが森性をよりいっそう強調する。

北側立面図 1/100



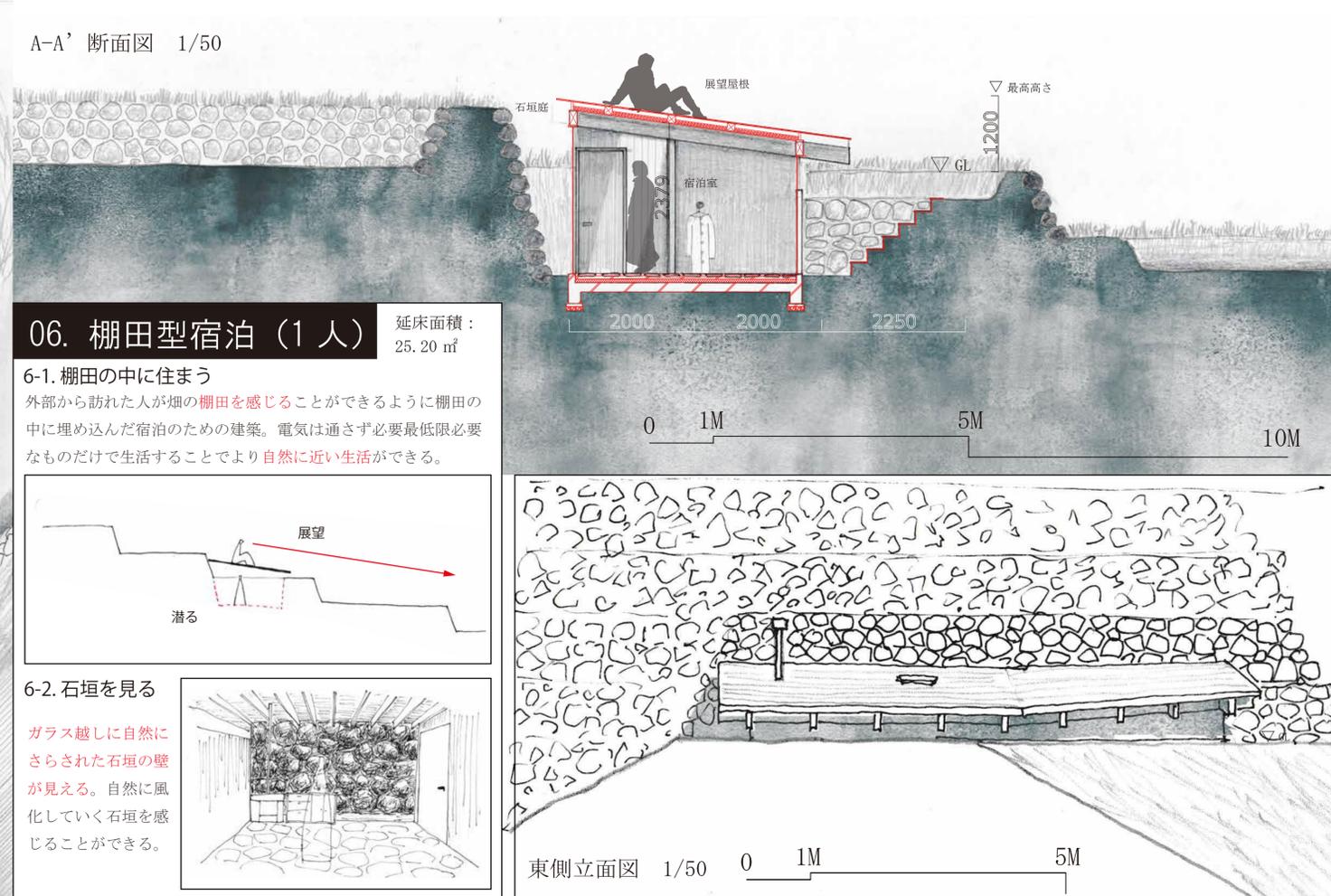
A-A' 断面図 1/100



配置図兼平面図 1/50



A-A' 断面図 1/50

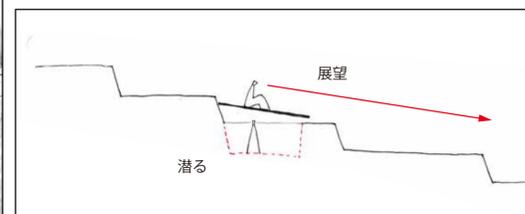


06. 棚田型宿泊 (1人)

延床面積 : 25.20 m²

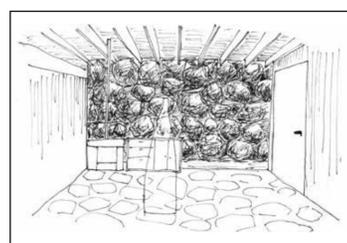
6-1. 棚田の中に住まう

外部から訪れた人が畑の棚田を感じることができるように棚田の中に埋め込んだ宿泊のための建築。電気は通さず必要最低限必要なもので生活することでより自然に近い生活ができる。



6-2. 石垣を見る

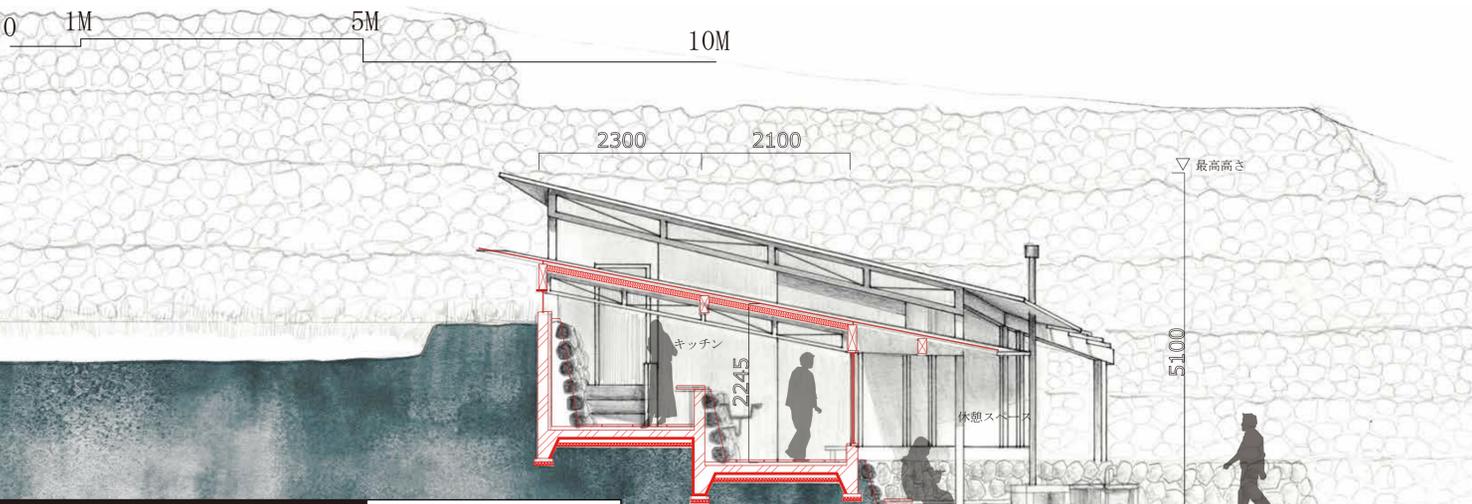
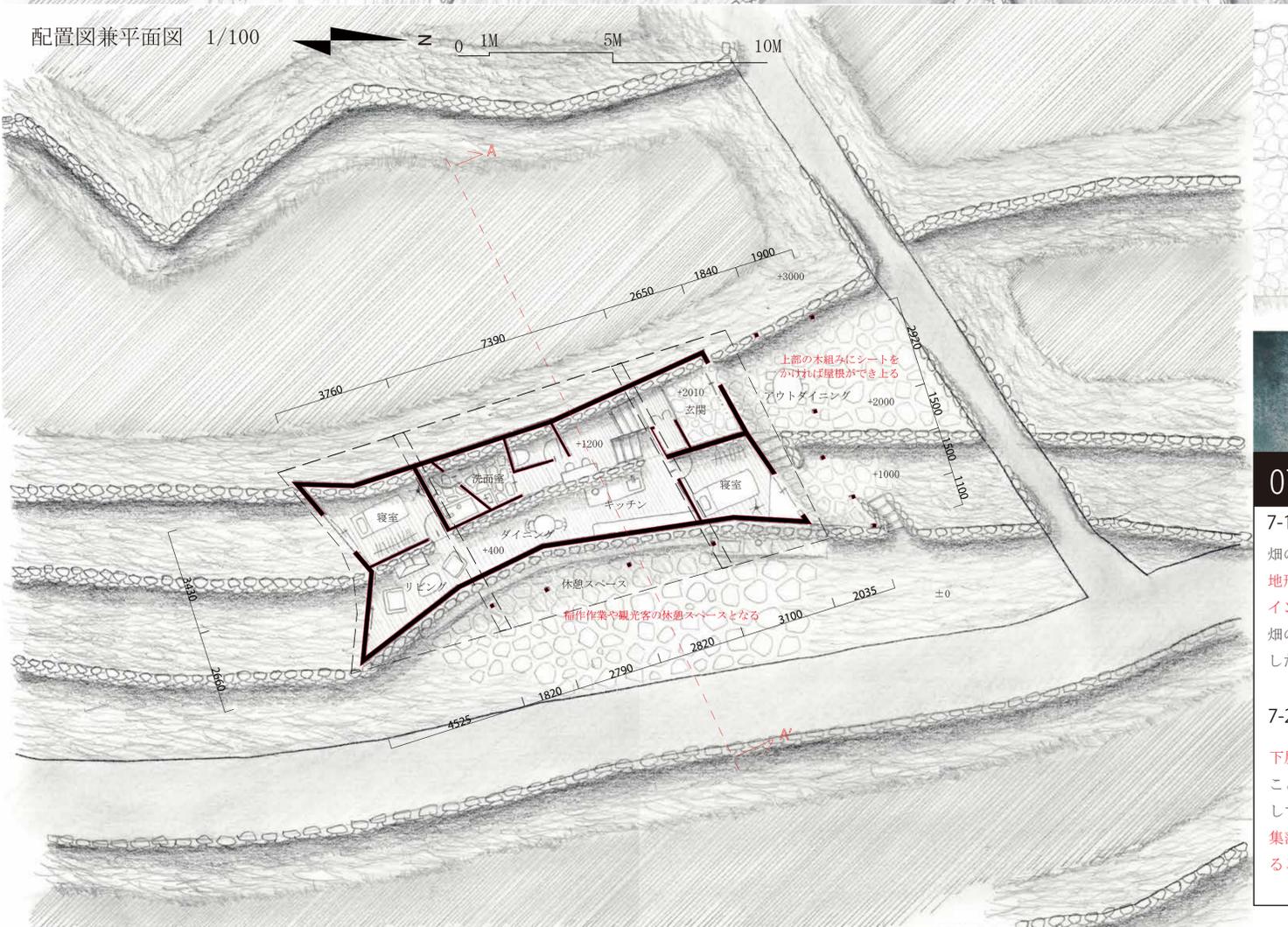
ガラス越しに自然にさらされた石垣の壁が見える。自然に風化していく石垣を感じることができる。



東側立面図 1/50



配置図兼平面図 1/100

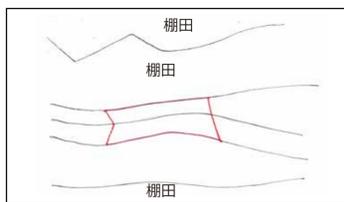


07. 棚田型宿泊 (2人)

延床面積 : 59.04 m²

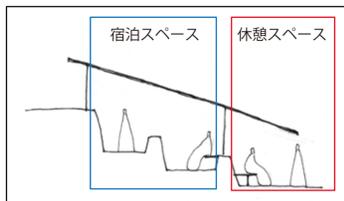
7-1. 等高線に合わせた外壁

畑の棚田集落の棚田の特徴である地形に合わせた有機的な棚田のラインをそのまま外壁のラインとし、畑の棚田をより感じられるようにした。

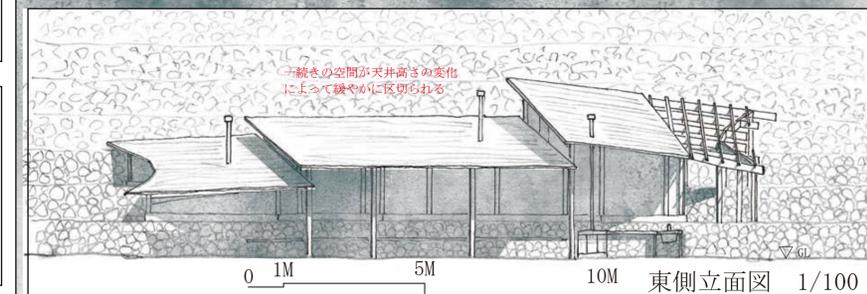


7-2. 交流を生む屋根下空間

下屋を東側に延長し、影を落とすことで稲作業の休憩スペースとして使える中間領域を生み出す。集落内外の人々が屋根の下に集まることで交流が生まれる。



A-A' 断面図 1/50



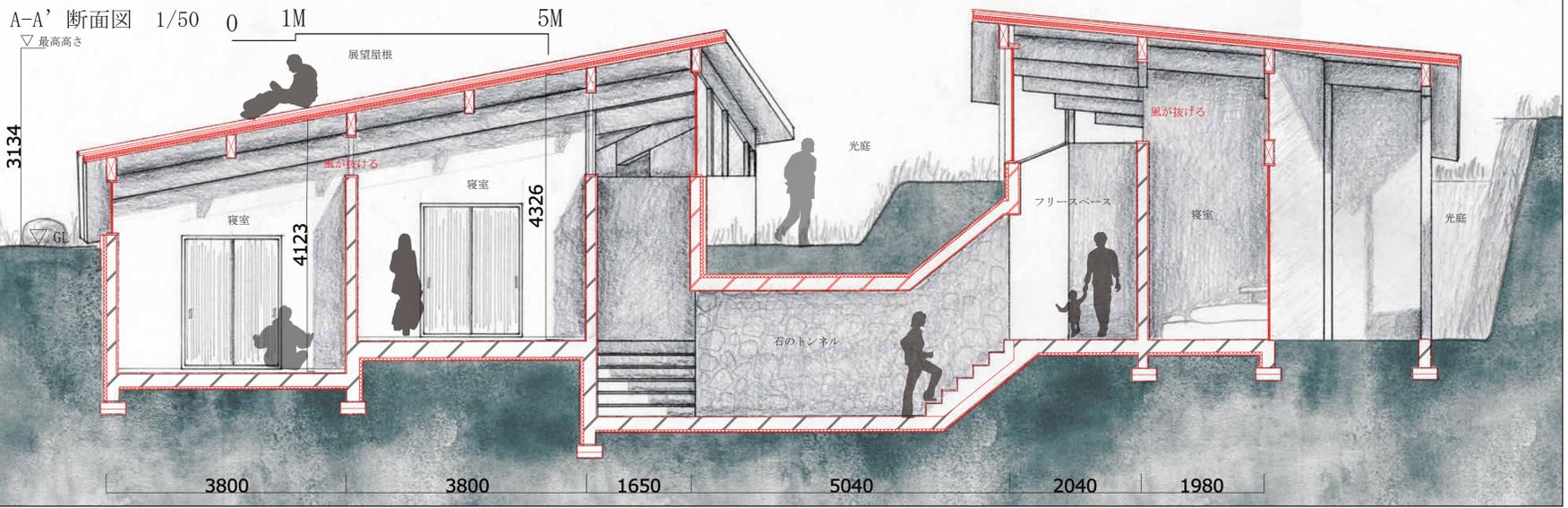
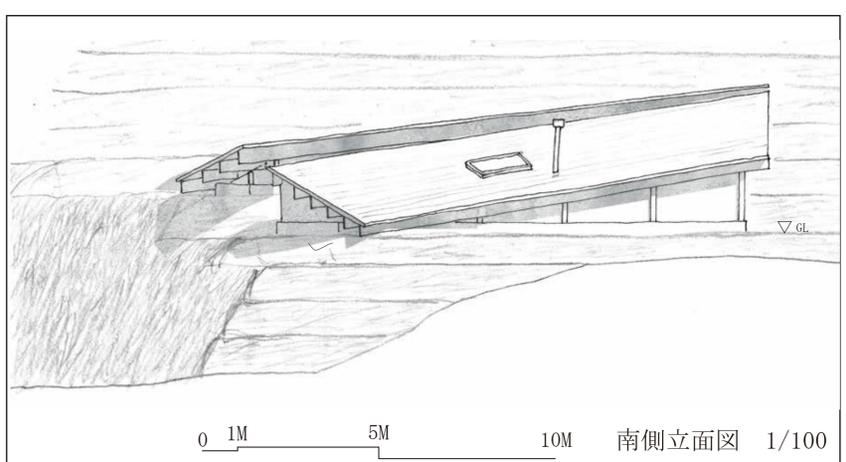
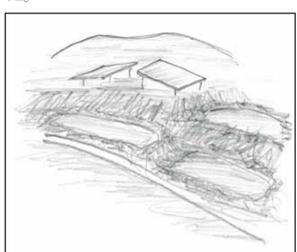
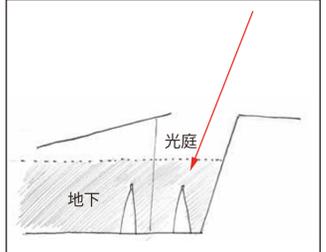
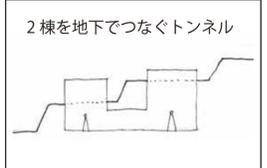
東側立面図 1/100



08. 棚田型宿泊 (3~6人)

延床面積：173.19㎡

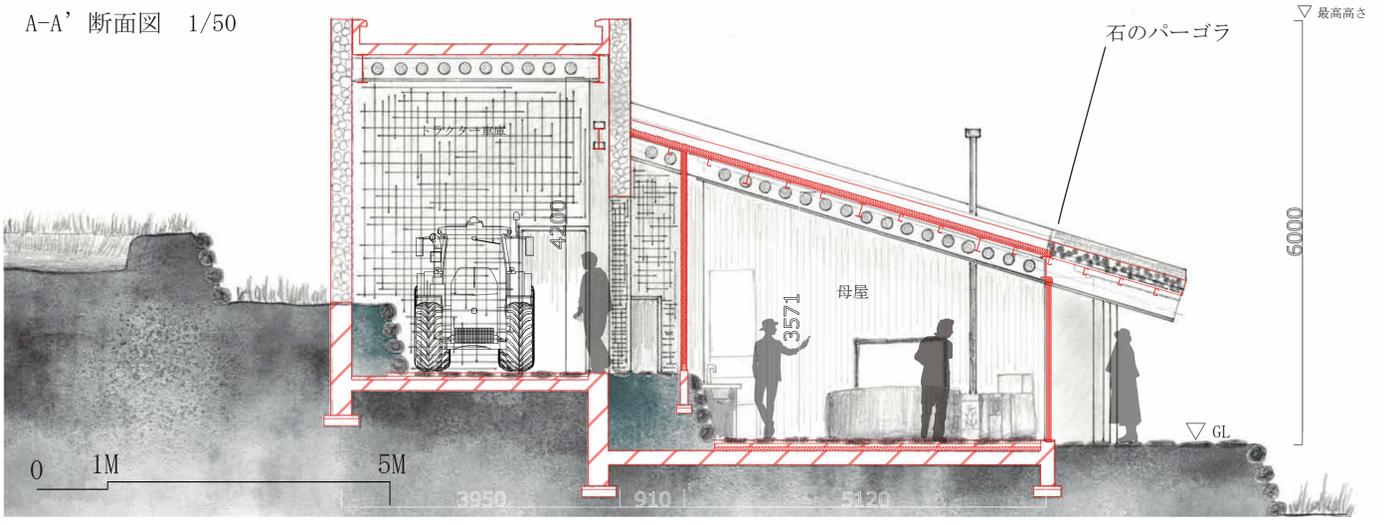
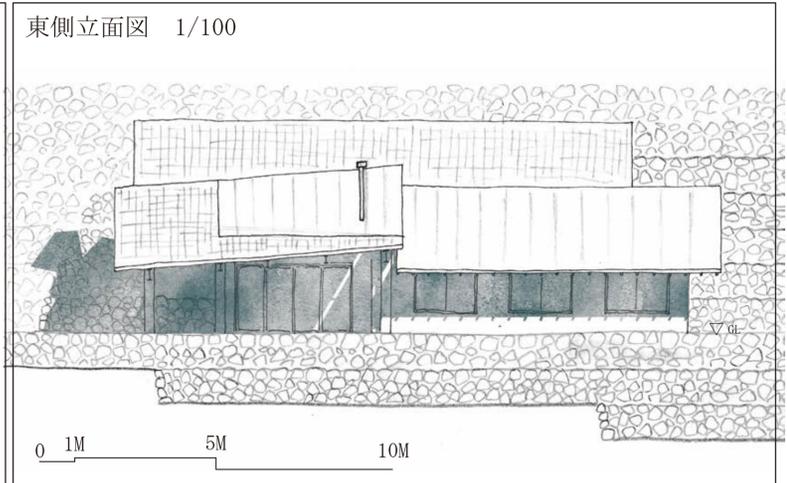
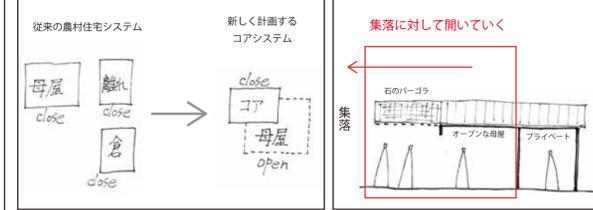
- 8-1. 土羽の段差を取り込む
このエリアの棚田の法面は土羽で構成されている。土羽の段差の前後に建物を配置し、土羽の下をくぐるトンネルで2棟をつなぐ。
- 8-2. 自然を感じる光庭
地下に大きく彫り込んだため、広い光庭を設けた。光庭には土羽の壁が顔を出す。を考慮しながら屋根のかけ方を考えた。
- 8-3. 山と調和する屋根
道から見たときの山と建築の関係性を考えた。



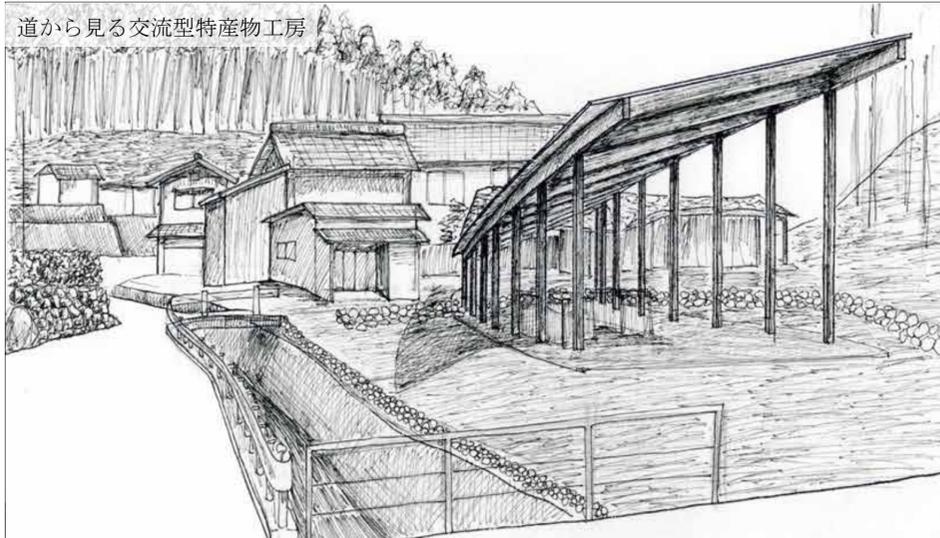
10. 住宅

延床面積：126.72㎡

- 10-1. 従来の農村住宅システムの解体とコアシステムの構築
農村住宅の基本構成は母屋・離れ・倉である。畑の棚田集落も同じように構成されているが、それぞれの建物が閉じてしまっているため、結果的に民家と集落との接点が薄れてしまっている。この状況を打破するために母屋・離れ・倉で構成された農村住宅システムを解体し、新たにコアとオープンな母屋で構成された住宅を提案する。



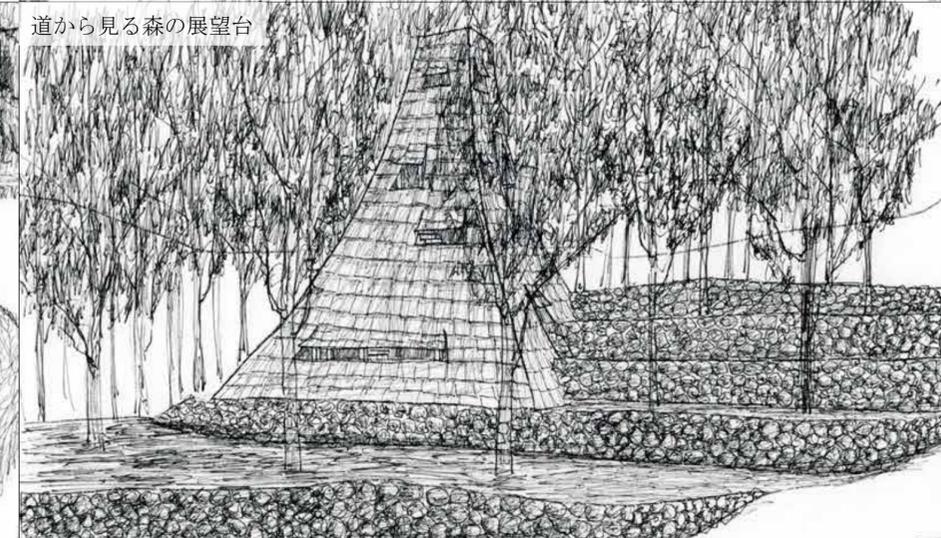
道から見る交流型特産物工房



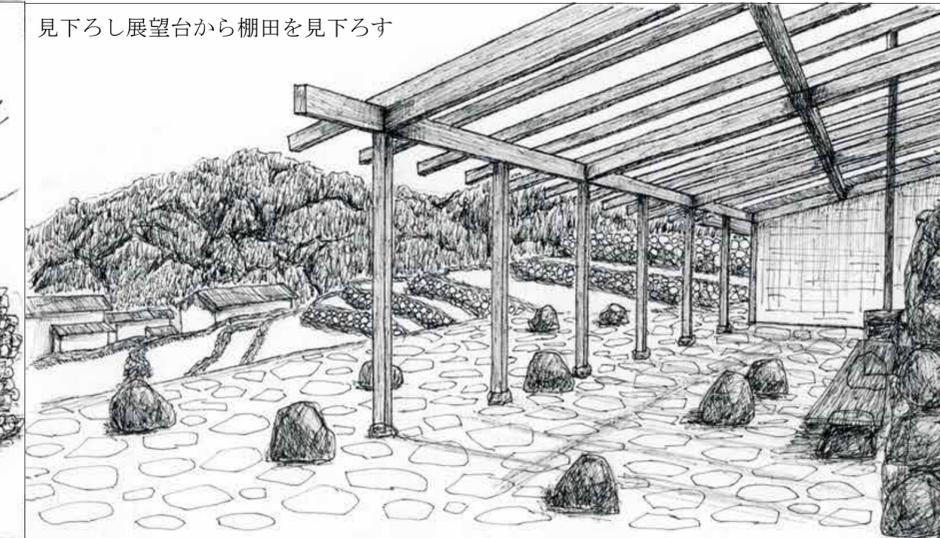
アプローチから見る見上げ展望台



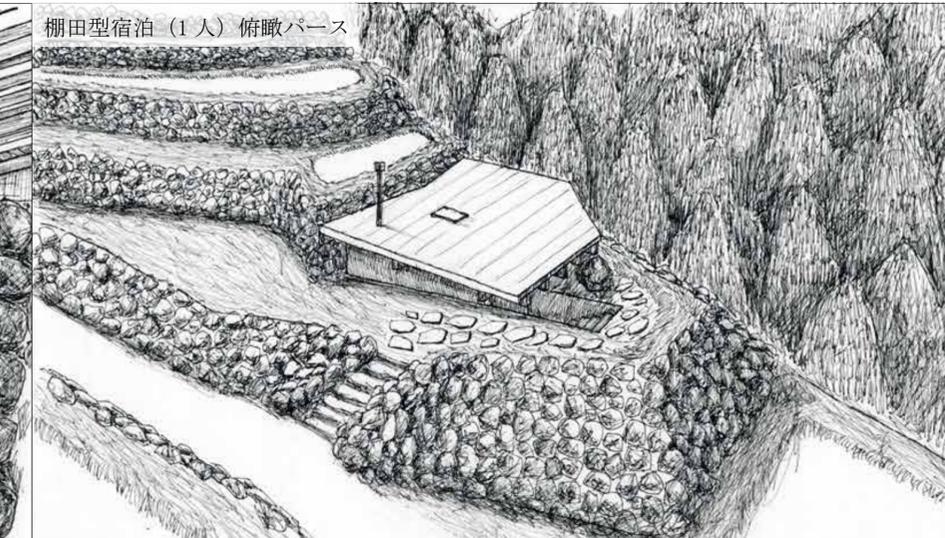
道から見る森の展望台



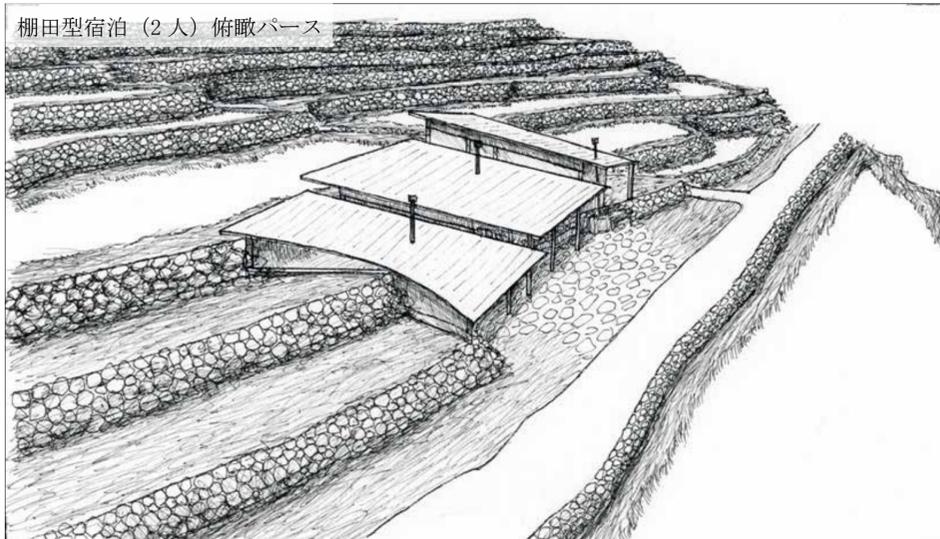
見下ろし展望台から棚田を見下ろす



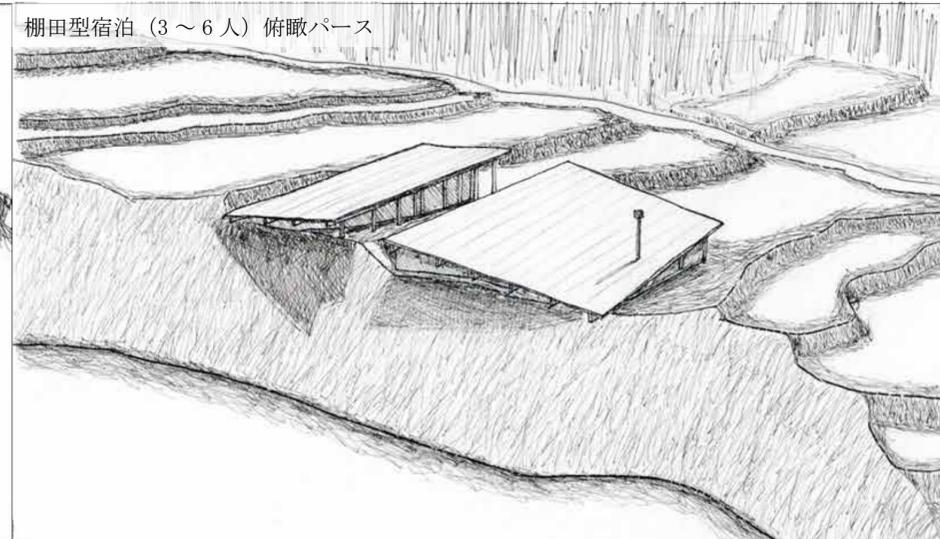
棚田型宿泊（1人）俯瞰パース



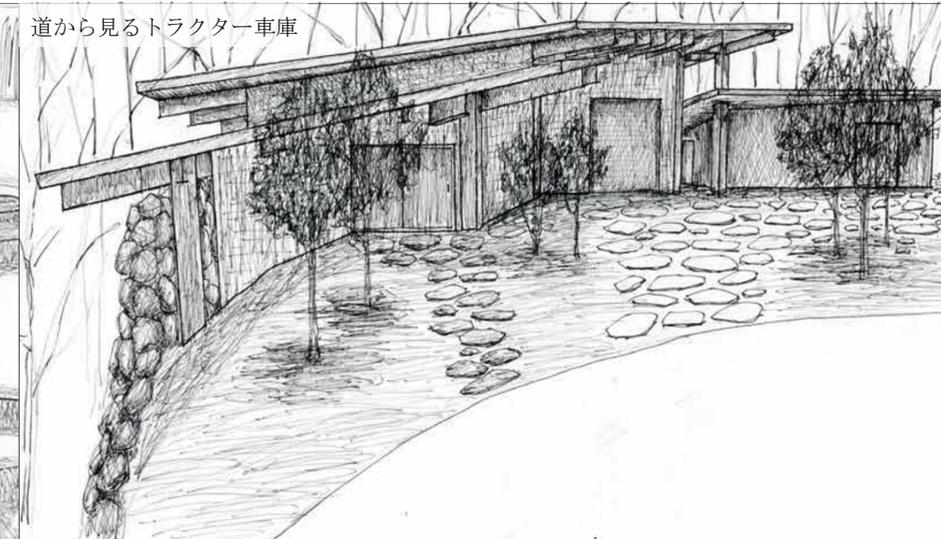
棚田型宿泊（2人）俯瞰パース



棚田型宿泊（3～6人）俯瞰パース



道から見るトラクター車庫



道から見る住宅



住宅母屋部分内観パース

